



標注七部集

清窓藏

猿蓑

古今よきもの、古宗鑑守武
 負徳宗因ノ時代ヲサシ今ハ貞
 享元祿ヲ云
 面起ス八面ヨリ得レリ拳白集
 月ももおもひて初すぬや時や
 幻術ハ即今呑カ吐カ類ナリ
 千載集此のウキヤノ歌ヲ
 テそ枕ヲ友のウキヤノゆめを
 入ルルルル 意図
 不変ハ不易ヲ云雲ハ流行ヲ云
 五徳ハ五常ト云又洪範カ五事ノ
 徳ニヤ貌曰恭言曰從視曰明聽曰
 聰思曰睿又信徳ヲ充俳諧ノ五
 徳ニヤ
 骨ニテ今作リタテト云ハ撰集抄
 ノ古事ナリ

表上長

晋其角序

俳諧の集つてくるや古今よりくるや
 此乃のちりて起るるを時をわや
 幻術の第一とてそののうま魂のなれハ
 是乃のゆめをたふはれりてくる
 世よとてくるやもく人もはれりて不変
 の変をよるりて五徳ハのふよ及ん
 らんをよるるをよるやもく人もはれり
 彼ゆりて人の骨をよる人もはれり

五元集ニ世蕉空庵ヲ訪スアリ
枯尾花ニ今年就中老衰ト
歎キあり云
白氏文集香雪松雪松蒼蒼者

攝州豊嶋郡ヨリ出ル葦ナリ

空也上人ハ世喜帝才ニ皇子云
元亨親書ニ親光勝不言姓氏
もノ字ニツラシテ瘦ノ二字ヲ相兼
ト云

冬風の留るをよむ

魂流ハ蒼もたけき庵の雪
雪の口ハ林の空をよむる
誰もとも健るハ雪の
ひらかけと約や雪のふりまき
其角
羽
仲七
去来

青臣追悼

氣香もよむ世を流したる跡
から鱧も空やの夜も空の月
海もよむ情ハ白くぬぬり
一月ハ我も来りて細くき
其角
乙卯
犬草
白古を純

五元集ニ息白キ下リ

元録二年ノ暮乙卯カ家ニ春ヲ
待テツラ吟ナリ

弱法師ハ乞食ナリ

年ノ一夜ノ隔ヲ薄壁ニ比喩
セシナリ
貞享四年去来千子伊勢熊
野訪セシ事アリ

巻第シテナリ巻際又巻第
非ナリ

秋沖赤や鼻息白一面のゆ

管をふみ又空を流したる跡
あゝやあゝとあゝとを情掛の
乙卯初空よむ

人ノ家をわきてきて去ハ年忘

弱法師 赤いゆを解の札
年のおや増祖父をきけハ小枕
片石の一をよむるハ高

雪をり年あやうけや伊勢熊野
たゞしやあゝのあゝと人あゝ

やうらねてよむるハ年の雪

其角

乙卯

祐甫

芭蕉

其角

長初

去来

同

羽

其角

去り

面起スハ序ニ云ル面目アルナリ
俗ニ外聞ヨキナリ

奥州行脚時那須野ノ吟
抑ふべき事并 歎くべき事
約引むけて云ふ事

いねしと人よむねの年
とる層破れ袴の歳とつり
路通
松丸

椿葉集卷之二

反

多岐のおもて於こそおねを
夜なきと墨う約方や時高
野を様々馬引むけまほき次
子親りあま限りて誰と
時高何れもなき野の門に指し
昼よすいさのこぼれかき時高
其角
木良
芭蕉
高白
九飛
智白

奥州真享の比吉系ニテ名
高き妓ナリ
無名抄ニ方々を云ふ事神の
入江よみよの末てゆきも
るや 彦の毛(こ)も
祐威法師

沁人もおもひたえし
さいしはせうくは信くらち
西と人

留魂をくお木の君姑 楠 櫓 史邦
入古のいそぎの中や中々
時高 澁よりかろの月より
ふちを代官店やほろも
志死をたふ家嫁を子親 真而
松島一見の成るもく 露の
毛をさるるり 吹い
松島おと露ふ方我れおと
うき赤を淋しとてよ 深古
旅館をさく 産をさる
笑楓葉をよ 集よ一さかり 曲水

中將実方長徳四年十二月
於任国卒

蓬生やらふまに下
舎を吟す

料足ハ錢の事ナリ

つらふハ綴の短語ナリ

剃カ 和名抄 鍊精

左傳葵猶能衛其足又聯珠
詩格唯有葵花向日傾

の塚にりまをわらむ物水道より
一里のりまをわらむ物水道より
二里のりまをわらむ物水道より
三里のりまをわらむ物水道より

蓬生やらふまに下 芭蕉

大和紀伊の境をわらむ物水道

東の熊野をわらむ物水道

料足つらふまに下

つらふもろをわらむ物水道 芭蕉

剃カ 和名抄 鍊精 凡兆

日のるや葵傾くまをわらむ 芭蕉

蓬生やらふまに下 芭蕉

七千本の葵をわらむ物水道

葵をわらむ物水道

葵の向をわらむ物水道

葵の時をわらむ物水道

葵のまをわらむ物水道

葵のまをわらむ物水道

葵のまをわらむ物水道

葵のまをわらむ物水道 其角

葵のまをわらむ物水道 其角

葵のまをわらむ物水道 其角

葵

興丁

近江滋賀樂ノ里ナリ

杜律註 凡流謂得前賢之流
 凡遺俗
 風流ノ始トハ陸奥ノ古風ノ遺
 俗ヲ云リ
 眉掃ハ化粧道具ナリ
 法隆寺ハ大和南無仏ノ太子
 ハ聖徳太子ノ御像也

つみぢふるけのふけや麦苗
 遊カ
 瑞を愛して
 麦葉のふけやむる桂
 智月
 麦の葉て鯉まきふふふ
 エト
 若水
 若水川の舟とて
 芭蕉
 風流のそとふれぬ田植
 芭蕉
 出羽のつねとて
 同
 眉掃を面打とてお粉のむ
 同
 法隆寺開帳南無佛の若水
 拜
 法隆のそとふれぬつねとて
 子那

鳴ノ海ノ間ナリ

おのらふちの眞東ナキナリ

ハ鬼屋谷ハ熊野山中ニアリ

田の削れ豆つるひり巻く水
 万平
 若水曲水の橋より
 玄来
 若火や吹とくされて焼のそと
 玄来
 勢田の若水二句
 九北
 雲の巻やまは流生れ若水丹
 九北
 若水や船は碇ておのらふち
 芭蕉
 之態舟の語はる時
 田上尼
 若水や愛おむるも鬼屋谷
 田上尼
 若水からよ移るもおのらふち
 高
 若水や石の中りかづの只
 事
 病後

和名抄三初
俗ニ云天棒棒ノ一

日見トイフハ長崎ヨリ大村
名ルヨノ出籠

古今ニ秋の夜の子の袂も
あつた袖は出てゆく
袖と又ゆらん
里のクヲ重イカニ誤ル本
心ヲ認ヘシ

イタリ
煩ナリ
ヨモ

ハ流をいふ子持鳴して涼しりの
文あつたつてふ

中祓あつた 柄の先のきりぬ 凡兆

つらつらうらうらうらうら

山よそ卯ちみおひ

買うももやうらうら 去来

子刈よそぬら 李由

元禄二年の菊の代をいれて

のくより 三歌のうらうら

いふふかうら 〇

いふふかうら

伊予ニハ 二トアリ

山家集ニハ 三トアリ

左の依人ト思ふ

酒家ト題アリト云

白氏文集ニ 因病病夫憐痛罹

一ト轉ナラン

寛馬 蝶 蟬 一種ナリ

多田 神社ハ八幡宮ナリ 実盛

ハ加州藤原ニテ 戦死ス胃ト

直衣ニ義仲親書ニ添テ 當

社ニ奉納ス

いふふかうら 〇

相の末うらうら 〇

る各うらうら 〇

初原うらうら 〇

堅田まで

病原の初うらうら 〇

海土の初うらうら 〇

か加の初うらうら 〇

宝物ト云 実盛ト云

かを田ト云 錦ト云

なうらうら

氣比明神ハ越前一宮ニ仲哀天皇ヲ祀ル
本仍ニ世他阿古古例ヲ細
道紀行ニ委シ

猶子ウシハ甥ウシナリ
カスルハ斯有夜ナリ

大和物語花山僧正ノ古事ヲ云
カ

向のよき宿も月をさすナカ 昔の

元祿二年つづきの湊の月をさす

兼比の明神も清きおのとの

古例成りて

自然に抱ゆるもさすのよ
芭蕉

仲秋の望月もさすのよ

かゝるおの月もさすのよ
去来

自然に抱ゆるもさすのよ
昌府

自然に抱ゆるもさすのよ
相和

自然に抱ゆるもさすのよ
尚白

自然に抱ゆるもさすのよ
凡兆

一戸陸奥南部領ナリ

鯉キ又黄鰻魚
和名抄ニ鱒知、如布里似鱒魚
而有黒點ニニヨツテ書ルカ

和名雅ニ鱒トス 鱒虚栗ニ
鱒トナリ

王安石詩ニ茅檐相對坐終日
一鳥不鳴山更幽

むつろーま云々冬ノ題誤リテ
爰ニ入カ

小ニ鱒ト云大ニ鱒ト云

一戸やをもさすのよ
去来

稗の種もさすのよ
越人

濃糟やかくさすのよ
正秀

阿やさすのよ
花葉

一鳥不鳴山更幽

物のさすのよ
凡兆

むつろーまさすのよ
曾良

松杖席のつき合おのよ
千里

崎とくや濃糟のつき合おのよ
珍頑

とらとらさすのよ
九兆

鱒釣るもさすのよ
才珠

田舎開ト云ハ五尺寸京間ハ六尺三寸ナリ五元集ニ菜園ト題ナリ

童子之又髪髪

柿美去来自戯ニイハ

改定ハ俳諧哥又則書ニ用ヒシ

田舎の落つる一葉の如
高白
其角
珍碩
土芳
九兆

自歌集抄舎

柿の如く梅の如く
去来
壁生
九兆

神田系

されしそはちの梅子の行なるは

神田の鞆うらむ 故是

拍子うつらつたる

花はた名をなすつら
花雪
立出る所の夕や風を
文草
世の中ハ鶯の尾の跡も
九兆
塩魚の塩をささるや秋の
同
春

猿蓑集卷之四

春

梅の人の怒り梅も下り
露沾

大名衆ハノ敬言固ヲ云リ

風疹 和名抄 風癩疹下

とらふはつたる

勸進帳 正月廿九日月次與行
通題 梅トナリ

上鴨の菊亭名なりんりま
具家三仕三人

碧巖三云陽牆見用便其
牛意ナリ

系隆卿之歌ニあるに
初秋の菊の香のわさよ

海子ひまの大神宮の神饌
紅きふせし其居るを
始とふ草依ニ依りて

海子ひまの大神宮の神饌
紅きふせし其居るを
始とふ草依ニ依りて

林和靖七言律詩ニ跡影横
斜水清淺暗香浮動月黄昏

元禄四年辛未

上鴨の山に花のやうに
候

一ノ草

梅の香やふり
カ、
句宜

庭

梅の香や砂利
土芳

初秋の菊の香
勝所
梅所
梅所

梅の香や酒の
香角

うたの香や
香角

活るふりの
芭蕉

疲藪や作り
子郡

灰捨ての梅
元飛

日高りの梅
支那

暗香浮動月黄昏
支那

入るの梅
風妻

花の香や
乙那

辛卯の
乙那

梅の香や
乙那

友の香や
乙那

友の香や
乙那

痛ハ猿ノ腰カケト見立シク

此ト大川ハ田溝ヲイヘリ

うらふんこ、廿五日、月、日、カ

うらふんこを詠ちて礼之
雪や下駄の窟まつく少田の虫
雪名虫又茶をまきぬら
蕨の雪柳うらういさうらぬ
は痛ハまきのちつき柳うな
物うらまうらう教寺柳う那
うらう大川柳雪まよふ柳う那
雪柳のまきぬらや鯉の住ま
雪けや柳うらまうらう
物うらうのうらまうらう月

田家まよふ

其角
凡兆
魚日
樵丸
ト宅
を水
尚白
一咲
木白
楊水

去来抄ニ俗情白シニ言ト去来
文ニ定ぶやの猫の恋の歌
うらう越人ノ香作トアリ

當座、今ノ通題ナリ

荒道

骨柴ハ枯柴也

うらうは荒ハ紀州よりせつ

去来抄ニ俗情白シニ言ト去来
文ニ定ぶやの猫の恋の歌
うらう越人ノ香作トアリ
當座、今ノ通題ナリ
骨柴ハ枯柴也
うらうは荒ハ紀州よりせつ
去来抄ニ俗情白シニ言ト去来
文ニ定ぶやの猫の恋の歌
うらう越人ノ香作トアリ
當座、今ノ通題ナリ
骨柴ハ枯柴也
うらうは荒ハ紀州よりせつ

芭蕉
越人
去来
龜翁
尚白
兔翁
荒雪
凡兆
玉角
杉峯

元祿以雜の使ト云事アリソ
姿カ

田螺ヲ臍ト見立リ

野實葱ノ花ナリ

加賀ノ白山ナリ

源文選注兩水流於地者

こもくハ芥ナリ

衡の巢ハ諸説アリトコニ出ル
以テ春ト定ムヘキカ

春風よこらば風聲の響のふ川
 桃柳破りけりくや女の子
 桃のむ境ききくぬ垣根の
 里人の遊春一とる田螺を
 蝶のすめく一和宿ききり葱の
 糸を切きてらねらぬ杖をり
 いのちのあり愛ももまむや
 漆
 ののかげやくもくのとの親も
 首飾ふむまの雀や椋の
 雲の敷や鳥をよきりて
 衡
 越より死弾一はきき籠の
 後の

イカ 萩子
 ミカハ 羽子
 烏巢
 嵐推
 半残
 カ山 杓妖
 イカ 園風
 珠願
 土芥
 芭蕉

ちやうきふくくもききよの
はかよひて

鶯の巢の樟の枝まはる
 雲よりスススススススス
 子や侍んちやうきき雀の
 いたる中一の物や雀の
 芭蕉庵のきき
 重草の編法や
 木山筋松
 山吹や宇治の焙煙の白少時
 芭蕉

イカ 九兆
 イカ 石口
 松風
 芭蕉
 曲水
 山店
 芭蕉

画讀

嵯峨日記ニハむろし
淮小綱
漢の一莖草トナリ一玉
カ

江談抄三白玄實僧都去き
辞すり時を つまは山水き
りーおとおろきつるあは
まらんやまゆり
空穂ハ矢を盛物也

之茶ふも多能世年、後切地
もさうぬ暮のあゝ松極を
ゆるうーか初く母の初かうつ
とてて中程を存体さうと他
の暮程さく味了れ侍きハ
ちか、いやを及ふ極の結さう
知人よりくくさき見り形
阿る信う睡中一ふの者さ
浪人のやうそそ
嵐せをその根取れを 总 鞠
腰さすれ宛中へのあ一知
半残
書眉
加賀

道灌山ノ東敵ノ北暮
里アリ文明十六年 鎌倉
ニテ討死ス

源氏須磨ノ巻ノ画ニヤ
いふ所のを原よわ
うしてとてあり

ちも更らるやうにさよふ
わーのそ
ちもやうにけくさるの志の果
道灌山よのゆ
乃産やむいその代を花え
源氏の画をん
標干一又たちるむのま
唐午の歳字を焼て
焼まきりされもさくはちうさ
むらうや伽藍の樞をー
海堂の茶を清り花の月
夢
岩
羽
加賀
北枝
凡地
善弘

有明の灯

冷

及之の夜をうむのおもひを
とく文何の思ふ思ふ心は
お二龍膽を思草トナリ
秋李ノ扱心スヘシ
何のそ六赤流ナリ

死生事大無常迅速

旅の馳そまらぬ〜 おく
まき女まきの智ちあるもむね
何おもひのそ 根のこころ
夕月秋夜の燈 福のほろを
んもこころを〜 何ぞの
うとつまよ 自慢のそを
又もたのの 飲を〜 出次
増〜 田の喜を〜 何ぞの
か茂の社をよき 社
物雲の尻聲 高く名をよ
百の屋を〜 何ぞの 迅速

蕉 水 兆 来 兆 水 兆 来 水

梅ヲ正花ニ用ヒシハ祖前廿二卷
ニカ芭蕉談ニ委シ初穂
作ルヘカラス

餞ノ吟長途ノ景物ヲ想像
玉ヘリ

和名抄葉之受岐三才圖繪以
糯糍今ハ主米ヲ以テ餅ノ形

昏暎の暮 海の 舟のそきよ
志うら〜 何ぞの 芭蕉
糸梅後一をよ 嘆を〜
春ハ三月 暖のそ
凡兆九 芭蕉九 野水九 去来九

蕉 兆 来 水

餞ニ品東武行

芭蕉

梅の葉さうこの 宿を〜 汁
何おもひ〜 何ぞの 芭蕉
何ぞの 吟を〜 何ぞの 芭蕉
何ぞの 稗を〜 何ぞの 芭蕉

蕉 水 兆 来 水

蓬戸をたふすも若の月
 又たむらう一住んをせり
 西行
 古き歌の梅はさかす
 後京極
 人すすて知も昔をぬき
 のこしをてつらうらん
 菅沼氏曲水子八膳所侯の家士
 幼住老人八四侯長臣本多八郎
 左門ト称ニ探山居士ト号ス天
 和三年没セリニヤ
 市中ニ去リ十年半ト天和初
 ヲリヲ云
 元禄三年八公羽四十七歳ナリ
 らの世のさや共見るの松を
 父よ母よと叫ぶくぬ
 夫木集ニ云々をぬくぬか
 一がらやもさすふるくも
 ぬぬせなれど
 早苗ふもふさふさの根を
 ノ句有
 志をさるる波のうねり

住まへりその戸あり蓬根
 をかへる屋根より破る
 と改むるり幼住をいふ
 くハ勇士菅沼氏曲水子の
 幼住老人の名我のそ
 をさるる事十年半あり
 といきふハ兼忠のみ
 を破るる勇羽家沼の
 ここの一高すれはゆ
 の荒縁よきひす破る
 三十四

高濱 能因
 夫木集ニかきさるるや
 葉のつらうこさす
 せをさるるむらう鳩俗
 つらうと云
 茨ハ字典ニ以茅覆屋也ト見
 タリ
 山家集ニゆり山をさす
 おの山をさすむらう
 やすらう
 さすらうハ志あす
 山家集ニ山をさす
 櫛鳥ノカリ詞トモ
 杜律吳楚東南折乾坤日夜
 浮 又杜律瀟湘洞庭虛應
 望楚天不斷四時雨

の波も濤ふたの浮葉の流
 つきせの一本の陰ふの
 茨阿多ぬ根結深を
 非月の初はかり
 うそせとさ一おもひ
 志の名残もをか
 山藤ねるあう
 かさるる使さるる
 東南よりり身ハ瀟湘
 山ハ東申しをさるる

睡癖ハ宋書陳搏癖史李
巖老臨ヲ好ソリ其五雜
俎等ヲ癖ノ人多シ
屠顔東坡詩唯要尚脚飛
屠顔王子端詩屠外屠顔
皆好山云云
石林詩話青山桐風坐黃
鳥狹書眠
三つ汲石くわくもなきは
唐ノ形 西行ノ歌カ未詳
僧正筑後御井郡高良山不
濡山蓮基院主一如僧正
如茂、祠官藤本甲斐守敦直
寛永北ノ能書ニテ親子ト夫
師流ナリ北向雲竹佐木志
津戸モ東直門ノナリ

人の睡子何多く恒年一たりて
みまなる物出きも形一持佛一
を備てぬの物をさむるよこ
いこころ生つてりさるを筑
山の僧平とか茂の甲斐何
教ふもそまの海よの由り
かりぬるをある人越して
いと子とくくと書を添て幻
字我おくらる 折てるる尾
ちりぬまてて山居よの
る茶多くは子屋も形本
越の菰蓑斗一枕のと
有に餅くくとぬる人よ
阿ふハ言やの菰蓑のそ
るのまの給くひあふ一
うらふまを我つまぬ
の端よかぬハ板屋の
折を付ひの打をたて
こころかくくんとそ
ぬこ山望み跡をかく
病身よまほそ世を
清年月の移り一柱
三十一

古文前集朱晦菴云谷雜詠
野人載酒求農談日西夕
張謂詩夜坐不厭胡上月
又白氏文集卷十抱膝前
影伴身
莊子問西問景日景子行
今子止景子坐今子起
固兩影外之微陰也
漸ナリヤ 音便ヤウナリ

越の菰蓑斗一枕のとぬ
有に餅くくとぬる人よ
阿ふハ言やの菰蓑のそ
るのまの給くひあふ一
うらふまを我つまぬ
の端よかぬハ板屋の
折を付ひの打をたて
こころかくくんとそ
ぬこ山望み跡をかく
病身よまほそ世を
清年月の移り一柱
三十一

佳人有佳美之徳あり翁ヲサス
満口錦繡ハ如住庵記ヲサス
依稀ハ長髯トナリ
勝覧ハ名所ニ同シ

震軒向井元端字履信号仁鳥
子又向震軒ト云去来ノ兄ナリ
具ハ供具也草ハ草稿也
伊勢ハ震風又大草ナト云大ナ
ハ推量違ヒナリ

茅屋竹椽繞數間
内有佳人獨養生
満口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覧
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日

震軒具草

如住庵初若日記、句ハ庵ノ閑靜
ト勝地ノ眺望ト翁ノ幽操トヲ
賞セル作ナリ

とつさめハ翁ノ嘆ヲ云リ

もく時ハ鶏ノ乱レ鳴時ヲイフ

海ノ深ナリ

岩梨ハ常ノ梨ヨリ花遅キ一種
下ノ和名抄稿、夜未奈之山梨也
細腰ハ俗ニ云ヤセナリコレモ
公羽ヲ云

りハ盛ナリ御佛餉知モハ
ソノ結トナリ

凡右日記

時多嗜中及々やる林麓ノ那	曲水
とつさめのつと静の友の山	碧水
勢もくもくしりくわゆる勢をく	玄糸
海はよも月もなやとくくニ	凡兆
新止を山岩和あはれ猿のあ	ふ那
細腰の体のあやや友の山	珍碩
贈紙帳	
おのりしり紙帳をけとほり	中経
りもなきとほのあふりおづも	里东
そを志五りのりもこけのさ	乙卯

花空木

多らくし、小貫束ナク又不案
内ト云ナリ方葉シテ闇者路
多豆多頭四ト云ニ同シ

訪ハ音問ナリ
多ラえてハ抱ノ義ナリ

膳所ハ上米ノ上地ナリ
麦ノ粉

書音ハ文ノ便リシ

一夜乃ハ反及部ノこと
さうしういふしげうと云ハ

假正字ナリ

顔ヤ萍ノ中ノむらうらつき

魁准

多らくし、一、客ニ下野ニ去リ月言

様志

五羽ラ羽衣ナリト云々

元志

本ツキニナレテハ

泥土

笠下ニナレテハ

史邦

月結ヤ海ノ底ノ

正秀

去ツクニハ

柳陰

吟ヤヤト云々

如行

訪ハ音問ナリ

水

柱ノ木ニナレテハ

市隱

目ノ下ヤ

市隱

文ニ云々

膳所米ヤ田苗ノ多ク

半路

麦ノ粉ニナレテハ

之道

一袋ニナレテハ

之道

書音

一夜乃ハ山ニナレテハ

長寄

夕立ヤ松ノ

及肩

昇猿腰掛

秋風ヤ田ノ

尚白

贈簾

去ツクニハ

北枝

扇女

羽の九兆ノ書

寵馬又寵雞酉陽俎状如促
織稍大脚長好窓電旁

明年弥生八元祿四年ナリ

木履ぬく傍よ生たり葵の書

色紙ノ書

障子のよき草紙や秋の露

福のよきらぬを佛の土産

石のやわらうそをそと秋の風

桶の輪やまわらうそをそと秋の風

墨ハ夕夕飯時のあつそをそと

吹や吹く塩をそとりのあつそをそと

越人今自く訪きて

蓮のよきそをそと入庵うぬ

明年弥生辰巳庵

木書

扇

智月

おお

昌房

何如

越人

等々

まゝや阿しとま果戸のいつ

菖菖

回夏

涼しきやけをそと一任控

曾良

史記滑稽猶俳諧
一本歸之韻三說歸鄉音同

清正記云唐大中九年終南山僧
了齋子結定習習一日發
其伽黎衣子獨被安坐群
猴有子隨皆定坐習史記
項羽記人言楚人沐猴而冠
果然逸人逸也
定坐習此事林間錄出下
云非其錄中此事十猶尋
孔學記學不躡寺曰不凌節
而施 玩弄者 絕超也
孤晚自來孟嘗君故事王
哀誦論千金之壽非孤之
勝也
易曰憧憧往來憧憧徐只
詩大雅編隆蟲之編聚也隆
威也
昆兒也仲次也
騷士說文今謂文人為騷人也

禮記檀弓子孫雖遠居處散
也 寬隱也散也極也
旄倪孟子見之曰旄与老同倪
弱小之称也
東坡全集龍尾頰歌三鹿言
細語都不擇
域界也 四年四時云
恥古之時字之日 檢年也
穀熟為一年
叔氏要賢安 僧為掛錫
俗書同 卒二也
揣度量才 幾樂希望也
詞海漁人云俳諧詞宗有損
風狂風騷同野 鄙也
僧云謂衲
丈竹尾大山世臣二十五歲三
舞武玉堂和尚參彈出家以
前芭蕉門人懶窩文佛約庵卜
号元祿十七年二月廿四日寂年
平四
漢輟耕錄謂賤丈夫為漢子

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非
此彼山寺偷衣朝市頂冠笑只任
心感物寫興而已矣洛下逸人兀
兆去來隨翁遊學棋館竹窓躡等
凌節斯有歲屬撰此集玩弄無已
自謂絕超狐腋白裘者也於是四
方吟友憧憧往來或千里寄書書
中皆有佳句日蘊月隆各程文章
然有昆仲騷士不集錄者索居竄
栖為難通信且有旄倪婦人不琢

磨者虛言細語為喜同志雖無至
其域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也維
眩元祿四稔辛未仲夏余掛錫於
洛陽冰亭偶會兆來吟席見需記
此更題昏尾卒接毫不揣拙庶幾
一藁高張有補于詞海漁人云

風狂野衲

丈草漢書
正竹書之

三作ル
於の目摩の目ハサトキニヤトヘ
テマリ

王維詩有聲画無聲詩

益斯

毛詩正義曰名篇之例義無定
準名不過五
源氏榮花のすくくのちのちんちん
まはしん

耳よのりこもろくろの目摩の目
よののそよ魂のまらりりりりや
を思のを喜のりおのつとぎ
の目よかーらかむけつや
着ちりて後まアアはららのニ
わーんとせんそをひるきんよ有
の画を何やうをむれに又くぬき
めめんえーりりりりりりりり
けりりりりりりりりりりりり
あるいやまのまののまのまの
福と例のりよ任せりりりりりり

文選首途

醉醒集ちきりあまふたぬ
ぬのりりりりりりりりりりり
ねやのりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりり
獨言を

考

甜ハ関シ

より取らつて事形はしはる。芭蕉松の
の首途よやつれうを携へて再命の
契りつはの集の予工及てかの冬
扱相々柄のりりりりりりりり
をりりりりりりりりりりりり
ハ甜えりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりり
成るたりりりりりりりりりり
云控りりりりりりりりりりり
おのりりりりりりりりりりり
年をりりりりりりりりりりり

浄依 市ノ字四句去
祖翁見落シテ許シ玉

終宵 ヨモスガク

蒟蒻 コンニヤク

本掛一本舞掛ニ誤ル

居合 劍術林崎重信カ末流

京師士生寺自三月十四日至廿日
有念佛其間夫入作俳優
东风凡ハ時雨の雨風の
ナトイフ和歌ノ例カ

々々川百のふらぬら月
新けふる味増ふまむ向い家
はららららんらん法代名のるる
路音尼の指病を押しけり
こんとんく斗り蹴る 名月
初原ふふ熱下地あてんる
おぼをあらふ居右はとぬあ
町流の侍りまると碓てむの産
門て押しく壬生の多佛
东风くせふ糞のいきれを押し
多く居るすまは膝うつらふ

、 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨

會林説話閉門可愛庭前月

親子ト親属くまゆをまよ
親ト子トソウニハラス
元祿ノハ浪人ヲ穿人ト書ク
白氏文集ニ穿落
オチ

江戸の老古向いの言をきくは
こちよもつれどかゝ白きりま
あゝよ十枚の肉のの孫の言
相のあきく 月 頃、あう
門まあて多あつて寝るる西のさ
はらららら 屋て表このくはる
初年よ女房のおやと振あて
又はあまもまもぬ穿 人
法印の湯治を送る花きりり
踊子をやりて 喜 麦の出来
とのあも東の方よ書をわけ

、 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨 坡 蕨

深川世蕉庵ニ行テルシ

いよ川よあはれ

室の星のちほくちり麦の穂

孤屋

庭の水鏡のちりる深川

芭蕉

山張を道とぬれつる御手

水

そつと歌けハ海のふち中

利牛

身寄す誰も寝るぬ香の月

蕉

とくくと解のころお秋のせ

を

きりくハ萩のトより出でて

牛

吹の泣きうりエとささるく

水

味をよの酒ふりし一あ

危

信おのちとくは文成を

蕉

僧都職原抄ニ准位殿大有
大少正權四分

ちうそハ進ミテナリ

風あけり秋の鳥の鳴きなり

水

赤のちりの水とちををさしなり

牛

鯉汁のちりるをさしなり

蕉

葉の雲をさしなり

危

は春ハとくちりるのちりる

牛

ちりる物をさしなり

水

雪の泣きをさしなり

屋

ちりる水とちりるのちりる

蕉

ちりる水とちりるのちりる

水

ちりる水とちりるのちりる

牛

ちりる水とちりるのちりる

蕉

鉢坊主ナリ

和名抄ニ如物

がめきハ舊の餌箒ノ中ニ
ちくめとあふふヨ云リ

伊勢矢川ハ中古賣ナアリニ処
トリ一本瀧ヲ関ニ誤ル

介、弁官之十二三ハ只ニ大敷
イハルノミル

まぐハアウニ跡言ニ止マ

まぐハアウニ跡言ニ止マ
善の月千葉の流汁画
掃ハ阿とあふ
ぢくあまの中そえうせんう
坊まよ那れとやまう仁平治
松飯やま川
吹く洋もつき雲のた
十二三年のむき雲のた
水巻くくもさ
日の阿くく方ハ阿くくむ竹のま
只まの雲まよ口まくく水

半 屋 波 半 屋 波 半 屋 波 半 屋

裏ノ詞ハ行ヲ行ガ見ヲ見ズト
云東近江ニ多キ詞カ

想占考ナリ

鯉ハ鰯ノ一種

三ヨイク
山教供ハ三月廿一日弘法大師
忌日ナリ

多クハ^{アキ}常木ノ和物南都
法論味増ヨクワレリ常木和
物ニニカキラシ

舞羽ハ^{ヒセ}白緑又クルキト云物
ナリ
集

まぐハアウニ跡言ニ止マ
天雲のおよまの月の照り
生那のくまおむひ
掃の雲霞をたたくまのく
帯雲のたつきまのくま
法新世の人のまのくま
海くくま二の雲のまのくま
なるく阿の掃くまのくま
まの掃をたたくまのくま
舞羽のまのくまつん
映くま西園武士のまのくま

半 屋 波 半 屋 波 半 屋 波 半 屋

蝶ハ能坐蕙糞ヲ

芋莖スイキ和名蕙芋莖ナリ
和名抄特牛万葉九特牛三
宅頭大牛云云云云云云但
言

尚きつやうりりやと大早
切蟻の喰御くくく極たそと
くくくく 納豆を仕込 彦彦
檀 日をさきくくくも物くく
藤をまげくくく下物のをくくく
はねたののあぢやけくくく
餅のくくくのきくく井のく
薯の目様くくく古櫃
はくくくのくくくくくく
くくくくくくくくくく
戸てかぐくくく居風名のく

牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡

楸ハ楸ノ正字ナリ

天満ハ大坂ナリ

堡墮城ハ石垣トモナキ小城云

けりくくく楸と楸のくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
師を比ふたのくくくく
餅控のくくくくくく
天満の状を又くくく
彦彦をくくくくくく
むくくくくくくく
燃去くくくくくく
十四五くくくく
月むくくくく城のく

牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡 牛 坡

極原ハ京々条通丹波口

いづ時薄暮ナリ

何年善提トハ久シキヲ云善
提達磨ノ九年面壁ヨリ起ル

濕氣ヨリ受シ病ヲ云

水菜ニ鯨ナリノ惣汁
谷の内引越して居る極原
尻軽ニ乗る返りつゆよく
落かろくもく時の面姑者
ハ舟つくく月の六日
擧立て居るの表居居る
出云つづる洞かふこひ
大水の何ぞくまの烟のけそ
何年善提去ぬぬ物の本
虫金よも月心の記を礎
丸の千日 濕をまらふらふ

牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡

一本ヤツフツツツツツニ誤ル

土のハ朝日初カニナリ

愠ウレム心カミ徒果トセ
早花ニナラシムニモてさせ
ぬんし
丁寧俗ニ口篇作ル非カ

定免年貢ノ定リナリ

投打も後立すくはるつこ
是なり其名盤イロの借るる
里離れ昨禮引のゆつきて
秋アキの月のを娘の襟エリと
糸イトふかろる朝アサも馬ウマの精セイを箸
るんし果ミるるハ馬ウマはるら
丁寧テイネイも仙臺センダイの口クチかり
訴ウツ指サシく滴ツて土ツチもある節
夕月セキツキも醫イ者の名ナををりたり
包ツミて夜ヨる鯨クジラのやきりの
定免テイメンを々年の風カゼニ欲ホシわけて

屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡

りまを はらうも形ふぬおろし一
隈^カの結ふ土圃をうらまかり
幾月^{ツキ}がうて越る^こを^こ坂
蔵もをぬ綴治屋のそ無の店遠
門^カ速^ハ出^ル町^ノあ^ら 碓
彼岸^カ色^シ一^ツ重^ノ志^ノ嘆^キ立^テ
之人^ノ形^ノう^らふ^おり^らま^を喜

牛 尾 坡 牛 尾 坡 碓

喜の部 数句

立喜

蓬^モ菜^ヲま^つた^らや伊勢^ノ初^ノ飯

芭蕉

加茂法示百首夏十五首の中
はらうの伊勢の志を人まて
伊勢うらけきまわらう
猶六来抄ニ奉シ 慈鎮

拾遺^ニ傳^ふあ^らい^きを^こも^の一^言
を^んら^んら^りの^言は^いふ^にぬ^れ
平家物語^ニ暖^まら^りの^言は^いふ^にぬ^れ
海^をん^らん^とて^揚喜^の原^ハ
丹波^ニ越^下り

柿小袴雀ハ奴隷ノ比論カ

懔^ナリ

その世のうらまをこもふに
色^ハい^ふや^あの^娘ま^れも^や
せし

ま^をや^まら^んら^んか^さり^松
み^ちの^りふ^葉越^ん管^の海^志
ま^や和^み丹^波の^鹿も^踊る^こ
か^まん^性も^つて^一を^の喜^の
い^そか^りま^をを^や喜^のか^よ袴
喰^つま^や本^名の^白の^櫓りの
け^しま^れの^徒坊^の水^程の
目^下も^中の^河や^年の^望
初^の歌^家草^をま^つた^らま^を
ま^つた^ら歌^のり^まを^まは^るは^喜の^原

梅

福子 松風 芭蕉 正喜 酒巻 谷水 沾園 孤舟 利半 町波

徒然草三京極入道ハ一重の梅
を評ふに極く梅の如し
又梅諸木ニヤカクともて感曲あり

住瓦ナリ

上三三
飛走リナリ木枯白ノ脇ノ詞向シ

梅一本つれくそりの海うり
うる気候や白の物本新よき申り
梅うるの命もまゝも初らう
梅のうらちを人あはし

梅ちよや東のきの口お白い
梅咲て湯殿の崩れをうり
未味梅のよき梅のよ
みあはくう候そらに梅のよ
お梅ハ娘のよき書きたり
梅のよきものせは活まぬ
とらうも新し白く書きたり

ときや梅の上かけく切刻
うらむれよ菜梅の暈り
梅月一足つてもわかれ
大原やうふのよき梅月
梅月やうくを梅きぬぬ中
梅川の命

梅のよきやうの跡も
十ものよきや梅月の古き
梅のよき初よか
梅のよき初よか
梅のよき初よか
梅のよき初よか

霞石

曲翠

支考

土芳

利年

湫刀

那坡

杉風

壬角

那坡

仙杖

吉原

大原

仙苑

利年

之乃

那坡

壬角

考

考少海く息く知く取
 うくひまふ茶をくん考の改
 考の考く部外考の部
 考や心の考く一里考上考
 うくひまの一考も考を入る考

柳

う考く考も考く考く柳考外
 考考考自考考考考考外
 考人考考考考考考考考外
 考考の考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外

全棟柿ナリ
 之扶持柳ル家ノ程ヨ云ルナリ

鄙ノ懐誠ニ雨中ト二字前書
 ナリ

町中一考く考の柳く取
 今ノ柳考外考考考考考考外

榊

考考考考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外
 考考考考考考考考考考外

考

うくひまの考考考考考考考考考考外

予... 利半

夏之部發句

首夏

塩魚の煮干... 子珊

碧嶺集 柳暗花明十万户

馬青白色也去来抄二月毛

かかけ桶ノ鑑掛り

棹ノ歌ハ船唄ナリ 宗祇の鬘世三名高...

船倉の暖簾... 利半

卯の巻

卯の巻 やくき柳の及枝... 芭蕉

旅行小

舟のむよ芦毛の... 許六

船ノ巻

棹の... 芭蕉

くせり
そらうーは 長嘯
ちやうもわくわくあつておどろ
きいひのちをうらやちやうもわく
わく
ちやうもわくわくあつておどろ
きいひのちをうらやちやうもわく
わく

強はた強は、辺茶ノ名多
ニ元祿、比此國ノ茶家ノ日用ニ
セリ

五のヤとて水尻のゆるい
久もたてくはともおろし
みりのおい首の骨を甲
帷子の下ぬきぬる裾
柳 岸 花 鳥

夜旅

山根を足おけて町の暑う
枯葉も昼息のやうな
二三番の宿もたつて
元山のか及もぬらさう
強はた強はち福も葉の白
は白の山田のゆるい

物の本ハ書籍ナリ

川中、白公明の文字ヲ讀連ヘテ
翁ト云、新書撰セシヨシ株廻シ
集ニ見エタリ

五月白

五月もや磯一かけの丸木橋
五月もなきや淀川大和川
五月もねふ針を揃へ子
五月もや春よきよりの高陸
五月もや新も林もりの本
源

川中の物もよきよりの本
月新もねふ針を揃へ子
源 五月もや新も林もりの本
女 首魚
針七

柄杓 雑魚

定家机 脇息 飯食物ト云

行初をさひひきとくはく縁うれ
崎丸にまゝくれて添一玉位を
すく一き城五粒を柄杓の余り
まき一き也流海のものにさく
り添いばあまき石よのりり
この日のかけうて海をさうれ

影さうれ

橘や空家机の下り ところ
炭斗むくや殊茶屋刺物さ
世の中や年をさるのり一の
ま乙女さかてとうらる茶飯

挿芝 智月 元華 志保 理波 妻重 杉丸 正島 里東 尾さ

山吹巴王義仲ノ妻ナリ

山草木ノ山ト云

水葵ハ海ナリ 葦ナリ 夏秋共茶花
開ク

本名改メテ

やちうあきも巴も出る因極うれ
屋島や百傳一足ぬむの良
たふ山やんもすまぬ生とく
焼の圓をさるさせよ茶の茶
る乞の雨茶こころ 借君外
浴カク一雨の夕やふ 葵
一ひきれ 櫛もうちつくも茶外
ちりかゝる櫛もさる茶外
猪の牙あもけさる茶子
園高賣竹何のちつき

許六 智月 北銀 乙助 犬守 仙花 桂舟 殘香 有有 怒凡

けしきい氣疎ナリ又物悲ニキ

スケナシ
無人望

源氏横笛ノ奏ノ伊カ

阿刺夷陀盛ノ上品ナリ

アルシ
餐膳

別墅ニ別荘ナリ

けしきい氣疎ノ柳やさうのうす

祐甫

一枝のまげぬまの柳のさうのうす

仙花

木のまや兒の遠くさうのうす

花雪

さうのうす人僕もさうのうす

戒めぬて流せぬさうのうす

よゝ知て阿らき泡盛やとあるかき

ぬまをたししなれり終つ海をわきて

改て海をぬのしくもるうの

阿人の別墅よのさうのうす

物清しそつとくおのかきをたしめ

行をまぼろし居てたうぬるは

炭俵集下巻

秋

秋の阿れつれりの中よ
目を凝て時候の序を
えとす

名月

名月やたつともぬぬ一よき

名月や極うすのす黍の虚

家閉てあしんぬる月夜

名月や誰吹起す森の光

松をたす物まぬの月見

もら汐の橋の依るよるの月

吹起す手ヲ合テ鳩ノ真似ヲ云

望沙ニテ大沙ヲ云リ

望峯六不下筑波相望ヲ奇

是ノ所ヲ六六灯ノ影ルナリ
ろふの約リナリ

おろかつ本まもるうし後の月 其角

むき一の仲秋の月初ころん待て

望峰ノ不盡筑波を

名月やふこ入ゆるかと縁河可 嘉納

セリ

等の葉ふ枝けくゆきむらつ 其角

星右ふもえさつおや板倉の縁 孤舟

多をふもえさつおや板倉の縁 花雪

于直葉盆

たうまきけくおけりふ新やまを 酒堂

痛ふき程ふの破て冬月の月 李由

江の

閑関ノ誤風俗文選ニテリ
説言葉明ニシテ人ヲ教諭ニ
ナリ

古歌ニ柳うま城様のをまも
せは、柳の枝ささきをうま

冬月の月 痛ふかをのまをうま 望坡

閑関

おろくやまの鏡あらしつ 芭蕉

おろくやまの鏡あらしつ 利合

おろくやまの鏡あらしつ 池田

秋虫

年ふれはあかきまきり 智月

悔いふ人のときも水やきり 犬子

あろきや若てはゆる程のこ 為五

あろきや若てはゆる程のこ 孤舟

大津

鹿

友藁の心をもとく少菴北

車末

人の心もよき

鹿のふむ跡や沢の躬^ニ恒^ニ形^ニ

素就

船のりよき

山にぬれぬまのくまの鹿の毛

土芳

学む

空城野の草やまじり秋を

柳隣

むすもくちりや村夜

町暮

けさの草や刈りし稲の端

猿轡

芦の穂や鳥打つる草もろ

犬草

躬恒形視鹿ノ足跡ニ似テ

看^{リカヒ}向^{カヒ}不^リ通^リ音^{ナリ}山^ノ家^ノ集
与^ル味^ハ草^ノ多^クス^ニ風^ニ吹^クマ^シテ
其^ノ心^ハも^よき^ニ也^{ナリ}

穀波津

芦の穂子若くつ方や末の穂

と末

女中の草粘をて

草粘や鼻の毛をてよかき

其南

園菜

菜畑の草の音のくもり

杉風

甜菜もまじりて丸の

柳臨

秋種物

柿のなる本をて世のやかに

利平

後菜や名をてる解の甲

祐南

秋のや菜の音の何より

木白

きんぎょのしほりもれはなつて
はるのうらみはなつて
をよめるのうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて

イソナ
草

石見を
歌

石見を
歌

お撲たふふゆや秋のかりき
石見のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて
あつた人か野のうらみはなつて

可波
大子
海老
若尾
利右
支考
お枝
依

唐ノの片袖くし月の空

其角

冬之部

初冬

風や沖より空ふ山のまきれ
市中や舟の葉もむらぬ三風
冬枯の隙くまぬるまきれ
松木や松張りし付そこつ
松の葉のまきれ舟のまきれ
刈草の葉のみのまきれ
風の葉のまきれ

冬角
柳葉
芭蕉
支梁
斜衣
柳葉
残雪

和名抄ニ雞冠菜度利徒加能利
紅色附石生

南宮山美濃国ノ一宮トリ

初雪や梅のまきれ
風や野マヤキまきれ梅の面ツ

梅之舟
ハ桑

南宮山美濃

梅のまきれ梅のまきれ
梅のまきれ梅のまきれ

梅葉
梅力

梅のまきれ梅のまきれ

梅白

梅のまきれ梅のまきれ

梅子

梅のまきれ梅のまきれ

梅葉
梅白

夫木集三ひりり 瑞を令り
何れもちりり 瑞の留り
次やちりり 顯昭法師

旅の時のこと

お宿の隣の軒に杖やこね

大船のつらさ

新雪の少くはなすやちね

新雪をよめるはなすやちね

神楽のよめるはなすやちね

ささげ下のよめるはなすやちね

しずめのお宿のよめるはなすやちね

このはなすはなすはなすはなす

ささげ下のよめるはなすやちね

砂波

芭蕉

砂波

酒を

砂波

お宿

お宿

利平

お宿のよめるはなすやちね

魚店や越えちりり

右のつらさ

しずめのお宿のよめるはなすやちね

つらさをよめるはなすやちね

お宿のよめるはなすやちね

お宿のよめるはなすやちね

お宿のよめるはなすやちね

お宿のよめるはなすやちね

お宿のよめるはなすやちね

我眉

里東

利平

利平

利平

利平

利平

利平

利平

利平

新吏令ニ納とて神ノ事ヲ
ふかりしナリ依所ノヤウノ
重ノウケレ 是家

冬ノ夜飯沼寺ノ事

杉のたけの雪纏ふ枝の影
 氷の結や依所ノ渡りの雪の納
 雪の重や依所ノ重なる雪の重
 岸裏の横たゝる雪の重
 海山の雪の重なる雪の重
 江の船や曲突しよる雪の重
 かしらさる狗よおとむ枝の影
 さる雪や粉糖のかさむの影
 禅門の草屋は依所ノ事

支考
 小枝
 許六
 湖夕
 乙卯
 素純
 黒丸
 芭蕉
 許六

題不知

黒丸

白魚コニハ冬季ニ出甲子紀行
冬ノ部ナリ即興感偶ニ任スニ

白魚の白き白ひや杉の影
 楳の火や焼くものさる尺
 岸申やこゝろ火燈の重なる
 海山の雪の重なる雪の重
 海つらる雪や依所ノ重なる

煤掃

煤掃のさく網つる大工の影
 すく掃 掃く我もくい子代
 解掃や之後をさる雪の重
 山伏の足さる雪の重なる

知自
 之道
 夫子
 素純
 千角
 芭蕉
 万平
 野坡
 嵐香

初冬如氷の浦に暮れゆく
初月

采暮

十九述老懐宗長
同くはるのこ老ぬれハ
こよる

はるもまきくくりの
杉風

漸
カ

年一をて雪一羽と
李由

氣
ハ

編ふのけつくしよ
初月

氣
ハ

年の松のまきく
猿嶽

氣
ハ

年の暮のまきく
理坡

昔は燕りの文よ
まきく

とくし
まきく

瓜をて心をさ
まきく

初年よまきく
初月

秋之部

其角

杜牧詩南山と秋色
相高
尾上山頂ヲ云々
約ナリ五元集ニ
杉とトアリ

秋の空屋上の杉
其角

おくれく一羽海
其角

初雪ふ日
其角

月のかく
其角

祖父の子の
其角

下京の
其角

坊の
其角

編纂ノ節諸説未詳

鈴繩ハ脈繩ニ水中ニ下リヲ知タメニ掛ル物ナリ

六井川行幸記ニ貫之
月ノ柱ノこまくまる編りよ
りみやみよまひて云く

宮近江高宮り

納下

癩癩

小本在と薄ニ誤

足輕のみやりを居る所下り
息よきこ之尺在乱の針
田の時よ可高把て投て云き
及名のまをむ難きのま
竹枝の引出しとあり付と疎
新よおまをこうたと疎の月
於繩上懸のをれいと云
原の下まる後とのまり
貫之の柄付柱のまとこうち
むりのまあり志のまをて云
いぎ心何とまをまのつといふ也

全 角 尺 角 尺 角 尺 角 尺 角 尺

字の編の何とかりかりしらり
及字のままをて云れり
阿といいハ小諸いやり
年よの巨蜜柑の糖も産ちりて
常ときあり居るを結す
天正結ハこれ次才のまをり
稗と壇の所あつる籠籠
幸一時一夜のこもる秋のこれ
やうりたる月のこもり
既端と居る海の跡
上陸をりと張ておく聲

尺 角 尺 角 尺 角 尺 角 尺 角 尺

説経淨瑠璃の双帝ニモ
の判官と標題一乃治年間
ノ印本アリ
其角孤屋各十六句

葉山子ノ句作哭兼假合意
カ
胸肩四ノ遠三句人情十三

小栗トウむらさきやまをさるゝ
りやもふふくく 浮舟の船
角 屋

孤屋松とくうの舟をてはくのかんぞ
ゆきよ今何白未満のうへに吹流るぬ

天師氏無り

堀崎

乃くさうり松のたらまえてあまふ
んとも水のたる秋うせ
乃月よ松いぬのうとあゆむ
堀のふちうて相のひらか
銅音よりぬきぬる波をき
堀 利牛 堀 坡

是が何程トク言ナリ
長谷寺ハセ乃九里ニ駒野里アリ
瓜石野也

えんちういんうす

つよしうり障るるのついやむ
瓜のそはかちんぬるか
直くま 庄也 本名をきくはぬ
年よりこの代者住秘めす
乃よりさとい十月のそら
春はらふまを舞う舞立て
ふまならぬく 娘の仕右
えんちういんを御まは深るぬえ
終持とかり底るう月
何そらぬ多仏やゆる零の内
野志 野子 十あておふ
堀 牛 堀 牛 堀 牛 堀 牛 堀 牛

蘇祿ハ借子ナリ

より平ハ後物ナリ

人のものも思ひに平ハ志こころ
もをや海にも十中八九なり
より平の機ハ大桶なり其を
むらゝの山言誰も思ひ廻らん
実ハて来て身神多し其を
仰りてきくべきをさうしく
此友の言ハきく秋の空
杉の末末より月か来て之
何しる老の言ハ下くとそ
を平をきくはやく其言新なる結
よハやくは我もよ古をきく

牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡

心真而有ハ左ニシテ約ナリ
正真ハ正直ニ同シ又古集并
正真是ハト云リ諸説紛然

富田山城宇治川際ナリ

去々〜人これハ何ハぬ商ハ
惟もも肩より〜ぬ者もて
来ハ出外家ノ意ハ
燒物ノ紐合〜富田 鮎
瑞を盛て〜も秘て〜
数ハハ雪瑞〜思案もて
先沖ハハ入 舟
内てより藻ノ舟も〜
ち〜もぬりふ〜ぬ茶茶

坡 牛 瑞 坡 牛 瑞 牛 坡 瑞 牛 坡

神皇月廿五日河川ノ事

芭蕉

振栗の厚衣の水之をのき海
 障子にやまをこめてある
 常函を櫃の少物を引く福を
 片をけりよ自をらんるる
 ぬ物の解をもよをぬれぬ
 割木のやまをさふのやま
 網のものをつぎぬかけ
 星さくんとるに二十ハ日
 ぬるまは八割の軍のたろこ
 泡雪の雪よ軽珠もきぬ
 ぬるまむむ松挑灯を吹消す

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

割木ハ薪云

冬の道一をさく

元和頃挑灯ハ箒ニ紙ヲ粘シテ用

肩壁

元板はりし彫損スモツル

鐵鬼ハ島人ノ異形ヲ云リ

第一ハ櫻間ナリ

肩痛よまゝ湯衣の着目茶
 上おまの干葉きをむらうを
 るまぬりて肉て為まら
 踊雲のきりりを着つ水て
 堀よのりる五十石元
 は急の鐵鬼も鉄をも目をも
 砂よぬるこのうらま子
 羽島の薫も出つく雪も
 吹よれよるまらよ
 川越一の帯一のふれ阿多
 平地の寺は房を敷垣

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

干地を日向のけしあきとて
塩を大野の首おとくちり
兼用し海をさるる末恒石
又沙治をさるるむすめ
とくくくくく大海も四の鐘
中よくそ傍野右の借りし
壁をくくおておきぬり月
風止こそ秋の臨り鹿さかり
鯉の鳴きの響をいし系
ちりちりと米の物場のけり

牛 至 蕉 坡 牛 屋 坡 牛 蕉 屋 蕉

諸ハ答ヘリ

鯉ノ鈴緋ナリ

胸炭輪炭方炭赤茶人ノ謂ト
コロナリ 四名ノ引畧

熊谷ハ仲仙及中ノ馭ナリ

目黒とありの連め流りてや
とくもかもむのさ屋中一時分
福居のちりを拂ふ去り
雪のねをれ口はれあき
口のけりあのおきふゆ空
下着をつ丹波よおゆて
おゆとくましく大急の徒
才あけくくゆさつて存自和
粟をさかす積り度ま相地
熊谷の堤をぬる秋の水

杉屋
牛 屋 坡
孤屋
芭蕉
子冊
柳磯
利牛
谷水

續猿蓑集卷之上

寄諸流紛然名トモ詞書ニ
去の自とよつては海でやう
晴くくは山をあらうなる
柳にたけはらふふをきよ
らこのちを中一よあつたり
りやうくをををををををトア
リ附舎ニ及ハシ

ハ九名定する柳一柳一
去のかくその富し柳一
初花のさるるをともあうの雨織る
内はとを一つく候のさるる
きのふのふのふのふのふのふ
豹脊一柳一柳一柳一柳一
濃柳もさるる一柳一柳一柳一
孫り取るとる祖父の借銭
細長よ皆をさるる一柳一

芭蕉
沾圃
鳥菟
里圃
沾
蕉
里
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉

下三
生憎ハ附意

煤を去るるをををの殿
約束の小鳥一提去るるを
十王のさるるの金伝へ出あうり
後の葉よ少路燈をさるる
下くさるるつたを門のさつて
いつくこの後ハ沙汰をを
そつと中ノ出はるるの及つれ
まぬよおるるをををの
尺さるる柳のさるる
去の葉さるるをを作太夫
仔細の下向よさるる

沾
蕉
里
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉

延をきてかの流足
悔一さいの一角の足もこま
清状をくしてまふしうまら
よまをきもる茶をのこまきつ
らゆりしるる國方のま
何うもぬくしてまてまき納迎
ゆまもまのるまの種の内
産所秋の産をふじつて
産所のままを女房のま
ゆまのる産の年産
ままをまてまのるまの産一産

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

ねまありニヨり書損ニヤ
ねまあり

カセ
市濃ナリ

三崎ハ能登敦賀ハ越前ノ国
ナリ

徳来もまをうてままをま
まをまのるまの産 産
産の産まをまを 納
まをまのるまの産
年くまあまの産
之崎敦賀の産
汁の産まをまの産
何の産まをまの産
まをまのるまの産
産の産まの産
納かりてまのるまの産

沾 里 菟 沾 里 菟 沾 里 菟 沾 里 菟 沾 里 菟

いさしき、向翁吟ニ載ル
同葉ニ玉里園ニ与ヘ玉フニヤ
草枯雁鳥眼疾

早下しと庭よふ料理らふ
れ乃て秋をなすう露の自
影よあなうく玉露のくさ
は冬も雪の母の阿と回
り付たり出羽の庄内
土の志れく時多時のまひま
づて葉味よを杉苗の冬
むのかけ葉をもち雛子の音の
阿と田の土のかうく論矣

里園

里 沽 苑 里 沽 苑 里 沽 苑

垣ノ根ノ霜ニ凍テ嵐ニ飛ニヤ
又輝^ラカ^トモ
節^カ博^カ

元板改トアリ一本頃トアリ

智恩院、京都東山浄土宗
本寺ナリ

あゝのちとささの葉をうと
大根のそとねちあしとれを
以下ともは能葉のむ秋
阿知不身たのびあ阿つめ能
若うちうくくと通る
智恩院の誓りの信極して
ささののほハ極るやく
姐の鱧^ス水かけ流し
目利て家いよふ葉しと
杖筆を強海の品御清兵衛
あくとらよとせとぬ口の能

沽園 芭蕉 馬寛 沽 苑 里 沽 苑 里 沽 苑 里

其よりいふる如くし此の略
一頁降て阿くくく風也
里 沽

沽圃

續猿蓑ノ題号ナレハ此巻集
の巻首ニ出スニト諸説ニイリ
無住法師ノ雜談集表の
了つふくすのんえりい
猿ノ松皮のぬのさーこのも

猿蓑よもれくる雲の杉高水
いよさくくねと野さるる 正
水つく池の中よりたつて
猿蓑やまもまをいしくく
船つ阿うるとやうな音の内
通りのちりきふんぬくくる秋
盆志まひ一そりてまきる船の魚
直に性か癖をまきりうねたり
考 蕉 考 蕉 考 蕉 考 蕉
然 然 然 然 然 然 然 然

是ヨリトモセスカ

是ヨリ他季移リニテ八句ツ
知年々身てまやもまはる物語
中國よりの状の吉 左 右
船口のゆきとよやら振舞れ
一重羽織り失てまらぬる
まはる年々まき茶の 楓 楓
ゆま門 阿く 空ぬの舟
初あゝ一島のくあけまらり
あ 際 光る 深の 小 鱒
足てくる 紀三井ハ志の略かり
若持ひまらまら 水き 白
こちねの又いぬまらり北まらり
考 然 考 然 考 然 考 然 考

三井寺ハ紀州名草郡ニ在リ此
邊彼岸ヨリ早ク花サント云リ

一本こちくは誤ル

然 考 然 考 然 考 然 考

大節なり、兩親ノ命日ト云リ

系ミヤ小脈をたよりかゝり
後吟の内義いさ度百敷か
唯海のささもむきささむ種敷
大せつとらう二百る若のう松
雪かきとらけー中の派を
たまる程の系掛ハ皆出家
其の世並ハ近年一の作
海よりも春のやまき自見一
赤鶴既をた庭の正 面
定ぬぬ娘のこりとり士つらめ
森汗のとまるとたつこの夢

考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

全五

大さきハ鑿 鋸ホノ音ナリ

賦ハ 鋪陳ナリ

ををををつらりとあつたの如
大工さきのりるよゆゆ
宋撫もりあつたをゆる
うら身て市の中を押あふ
はあつた海生ハむのけもなると
略のあつたのまゝぬけぬ夫

然 蕉 考 蕉 然 考

今宵賦

野盤子

支考

今宵ハ六月十日のささかふかふい

天文志ニ鶯高飛而定天氣
又昏ヨリ前ニ啼八日和昏ヨリ
後ニ鳴ハ降ト云

又鶯
鶯若又鶯

つら石より身をまててか
飯櫃なる酒桶もむちお経
もてて工をを〜〜照降
お清うるうらよま〜〜樽の裏
お佛の糸よ〜〜を〜〜込
平野の草花の芽多〜〜たを
秋の〜〜の居た
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の

高 翠 然 考 翠 然 考 高 翠 然 考 高

大和

晦日前ニ昏ニ際ト云

去風ふ若草のすうい〜〜
鶯〜〜村〜〜け〜〜ら
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の
〜〜の〜〜の〜〜の

然 考 翠 然 考 高 翠 然 考 高

るゝ表 箇ナリ

鈍

花屋日記云此遺物は頭陀中ニ
後猿蓑ト題アリテ可仙三卷
發句四五吟ホト外ハ書持ノ
反故等入トアリ此卷ノ中何レカ
ニ卷宿風入ト云

をりく下りく等の上之脂飛
虫籠釣四糸の角の川原所
高洲を下りたる表一箇
たのやうな體を足かきす柄の
大まきな體のとしよ中ゆる
其考
孫うけ積一孫柳の下

考然翠高然考

半九

續猿蓑集卷之下

春之部

总撰

温石の下りく等と初撰
森何多し又その内り初撰
新しおぬ散りも出よ初撰
止るや木の段々もあつた
角いお一人きかちあかの友
かきや味なる朝のやまを
富貴なる酒をよむる文を

其角

其角
首蕉
洞木
文子
酒堂

倦ナリ

卓文君ノ故事ナリ

瓜を多し磁のやうなれよ思ひ出さるる

又

酒酌即ち琴の音せよ室のこゑ
 欸うして降出をなかりとくふ
 人の言葉もかく寂りしうさく下
 早うさかや那半一のむの北面
 七のうらむはくおとる女中
 又ささくさうおひはや初さく下
 嘆息をわたりけさるる志未
 家たやあつらえまはらり梅
 二の橋やまきふ吹込鯛の鼻
 惟然
 支考
 沾渥
 猿雅
 物和
 乙歌
 木節
 沾荷
 子珊

興

兼出のまきふ吹込鯛の鼻 卓袋

田家

蕩翁のなむとらん山さく下
 嘆うるもや飯米五斗石
 山のまきふのく下木のやせり
 ちさき木の根やあふまきむの流
 ちさきを足せおろせん人に流
 とれわくよまき床まきむの表
 めうまき床のまきむの表
 一かへむえのあつや旦取 寺
 八まき床まきふのまきむの表

事やと
 梳首
 一相
 ぬき
 其南
 一海
 卓袋
 沾圃

いみ草

浮梅や蒿こゆるおぬく
船のゆ止む祖のい草
夕波の形よさゆる草のぬ
一株の牡丹のさよ草のぬ

梅附柳

春もやくりをとりふ自と梅
衣更あや大黒梅も梅のむ
ち梅のぬるの業をうりぬをさ
里防り確きやうりのむ
投入や梅のおよに落のたう

五元集三宰府奉納守梅の
云々トリ

尾頭
曲翠
昌房
昌房
昌房

芭蕉

水

其角

昌房

昌房

病僧のたまく梅のさうり
下りてをい草をさす梅のむ

昌房

為るや梅のゆきと下りぬ
さうり梅やうりかよなをさうり

魚日

痛ふや梅のゆきをさす
天神の社をゆり

大丹

身まつけとゆき梅のぬ
それくの結のちや梅柳

梅系

時くハ水よあちや川柳
追々城をうりて古柳

千原

喜梅のさるれくをさすの曲

喜元

江戸

喜元

追々城をうりて古柳

喜元

喜梅のさるれくをさすの曲

喜元

喜梅のさるれくをさすの曲

喜元

歸をあげてくるを由り種々 巳丈

鳥 附魚

其のふみより大御経を天
 七月にまふとけりや
 也知候人
 和名^{トリノイミ}倍羅麼俗謂保呂羽
 保呂ハ保呂抄ノ畧言ナリ
 眼ノサキ眼膜ナリ
 其角 史科 智月 芭魚 玄束 酒堂 傘下 水江 鹿耳 鹿耳
 鹿耳や田を拾うてすすむの如と

西河

西河

葉の平や方とわたりて秋なる
 雀の子や姉のふりかへし鯉の穂
 楓のうらやまうらや花の子烟の如
 幼鴨や赤ねまつれきの磯を
 茅野西河の流
 鮎の子のこころささげし 流のそと
 物笑とせうらうらう小鮎の
 赤い魚の一かきやうやゆも
 白魚のまろまろもはきぬし
 流川はたひて
 白魚をふみまをさす思ふ
 少年 若尾 穂市 河魁 釣竿 土芽 圃水 子珊 少鱗 其角

秋冬ト古来ヨリ用素トリ
トモハモセハハナリトモハハ
シのハナリトモハハナリトモハハ

秋冬附躑躅上藤

山や池の干しつゝも義しとく
富指

田舎の人を對して

山崎もちつゝも葉の鱗をちり
酒堂

堀おとそつゝの株や様のみり
雪芝

義晴や種まきとく藤のむ
荊口

春月

山の端をうらふ鳥の春の月
長崎 魯回

春の附喜堂性

物よりききの座よりや春のさ
荊口

かき調ふ合たり春のる
乃就

鴨 鷄

某記 沫雪水 泡ニ似名ナル
ニ淡ニ作ハ誤リカ

春のや座も 阿のる 春 河
游刀

けりとの一主鳥の武江の株店を
長崎

春のや枕とつゝもくもみ本
支考

春のやきりつゝも綴治り提
桃首

注雪やるよ道とて春の笠
風夏

仍つてや提の店も石の土
風睡

沙干

のり帆の落路をぬぬ改干
吉原

お川を石巻のかけぬ又沙干
富指

雑言

黒石の黒土ヨリ

雀カキハ草木の生立ヲ云リ

小笠原ハ元録の小唄ヨリ

出のりや氣動るな加懐
あそやまゝとて越ゆる相の苗
黒石の木のまゝもやまみどり
阿美や巖日橋のかけらも
少年をよき良のまゝもやまみどり
新毎り福治や市や市
木の芽もろ花かゝぬぬけきり
まの白や茶の木の中のまゝも
三尺の鯉もぬるまゝも池
引るの中も交るや回も

と内書

許六
風陸
土芳
配力
万平
苦蘆
均水
心香
仙化
玄鹿

是なり予あつて集ニイ介

螺海^{イノ}似丸^{イノ}螺者^{イノ}モ用フ

詩^{イノ}齊風^{イノ}東方^{イノ}味^{イノ}明^{イノ}顛^{イノ}衣^{イノ}裳^{イノ}
顛^{イノ}之^{イノ}倒^{イノ}之^{イノ}自^{イノ}足^{イノ}之^{イノ}

鏡裏^{イノ}梅^{イノ}下^{イノ}櫻^{イノ}羽^{イノ}粉^{イノ}骨^{イノ}炭^{イノ}旦^{イノ}

稚花を白酒をうらみ歌うる

歳旦

あ水やまゝくくくき落ゆ
花はハ年の雲の立所
雪や雑者としての雲つ
まき葉の具をつひひ
母方の紋をふりやまき
清いしる衣裳を顔
さるや相海を衣のうら
人もあぬまは鏡のうらの

玄考

武心
百歳
高白
圃苗
心香
子川
苦蘆

山ノ井ニ築具多クヤカシク
 有り多ク一麗キ小姫ヲ養ヒ
 觀阿弥世阿弥ハ猿樂ノ初代
 二代ナリ
 羽吹ハ羽夕キナリ

鳴る松の木のうまき
 標のせぬ跡中々
 美々や花あけは
 空を掃く風も
 初まやうと
 いろやま
 子供ら
 春ふか
 薫る葉
 鮭の鱗

九十七

中原康富記ニ文安六年九月
 若狭白比丘尼上浴ナリ又卧
 雲曰伴ハ百歳ノ老尼若狭
 浴ニ入浴中ノ者ヲ觀ス
 元朝賣リク若狭ノ礼ナリ

髪

初よりや
 世の業
 ぬき
 我
 掃
 虫

九十七

百多部
 郭公

友等やあるの美らき一とく 拙候

まを成るの良典

ちらつやいふもれもも華り 法圃

夕刻や破く島出ん 甚の穴 甚蕪

夕島や裸て記て 甚なる 荒集

薄のち成ちく 甚なる 球貞

蘭のちいひりく 水の濁りく 矢妙

甚のちあやこちもれ 水盤れ 白き

あやこち 甚の 極おとん 良品

瓜

朝高又よとれ 瓜の土 芭蕉

後日記三双命瓜の作下

那瓜や神、乃とも年々くく 玉曉

牡丹

薄あやうく 様いささぬ牡丹 風流

早苗

赤入やを白の田植のゆり 卯七

卯七如又 踏くてやん 雲指

卯七の力の植る 早苗 魚白

田植く 早苗 重釣

一田つり 早苗 小枝

里のり 早苗 支考

管

多来抄三卯七日先師述化のま
年一差をきりしゆり時の紙
とつりよあふ入集一
ソのよま下

真手五頁

三才圖會^{イナシラ}無花果^ハ二月而熟^{ニシラ}
故者^シ假名^ニニユク^リ乎^ク非^ズ

和名抄^{イナシラ} 鯉性^ニ沉伏^ニ而在^リ石間^者

故者^シ假名^ニニユク^リ乎^ク非^ズ

既涼

ま—と木林^ノ揺^ル竹^ノ藪^ノつ^レの
ま^ま果^ノや^ハ廣^ク葉^ノも^もむ^むり^り夕^夕涼

涼川の底^ノを^シり^て

とせ^ハ我^レ等^ガ中^ノ林^ノ中^ノふ^ふら^らの^の涼^涼

涼^涼—と^とや^やか^かる^るを^を出^出す^すの^の涼^涼も^もそ

石^石—[—]や^や裏^裏の^の涼^涼も^もす^す—

ま^ま—[—]と^と牛^牛の^の尾^尾を^を向^向の^の涼^涼

涼奥^三句

許^許六^六

半^半殘^殘

性^性然^然

史^史邦^邦

杜^杜年^年

乃^乃年^年

涼^涼—と^と木^木林^林の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と石^石の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と牛^牛の^の尾^尾を^を向^向の^の涼^涼

涼^涼—と^と木^木林^林の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と石^石の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と牛^牛の^の尾^尾を^を向^向の^の涼^涼

涼^涼—と^と木^木林^林の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と石^石の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼—と^と牛^牛の^の尾^尾を^を向^向の^の涼^涼

涼^涼—と^と木^木林^林の^の涼^涼も^もす^す—

涼^涼

支^支考^考

聖^聖芝^芝

涼^涼刀^刀

玄^玄菜^菜

正^正菜^菜

土^土芳^芳

我^我眉^眉

里^里園^園

感夏

かゝるもや思つて午したの隅
李盛る足世のわさうの思ふ東
五月

教賢者の言のやまれば
差つた

室もよみ清て森冷の思ふよ
衣着の内始下つてや持つての
懐さうる日盛下つて春に
花ゆふ地もよみぬ思ふよ
まの戸や思ふよ有さうか
思ふよや思ふよ思ふよ思ふよ
正秀
乙卯
怒々
尾張
嘉寛
我輩
卯昔

元板雨ノ字ヲ脱ス今補之
小文庫ニ素のまゝとアリ
抄ニ論アリ 病勢ヲ熟字白氏
文集ニ出

種あけて暑さいやまの暑さ
粘りぬる蛇もねのあつさ
立寄れハむつと飛石の暑さ
外の子

暑さぬもさうく岸の暑さ
まゆや煙のいつく序の暑さ
五月雨附又立

らぬやまもぬるに徴るの中
さみよ水や一帯たふ素の如
五月雨や燈もぬ確つた
久きよさうなまより日傘
卓登
里東
沾圃
あ誠
お夏
不玉
首直
法圃
拙候

くもや 草の葉もくはの芦
クまやらうらうら 竹の皮
いづこよふ年かゝるやまこ町
蝉
正秀
園水
曉鳥
苦蘆

らるや中 灰の極の聲
きつと 息を吐ききり 極の聲
森の 極の 極の 極の 極の
極の 極の 極の 極の 極の
鳥
正秀
乙卯
曉鳥

籠の目や 濁るもくはら 鯉
難夏
鳥
正秀

酒席

飯後
イカキ
ニモ作ル

空を 飛ぶもの 動止むらうり
虫のくふ 反葉とや ちの細
反葉も 極の 極の 極の
川村
如去

去ら 枝や 葉の 極の 極の 極の
黒字も 極の 極の 極の 極の
夕雲の 極の 極の 極の 極の
水頭

魚の 極の 極の 極の 極の
極の 極の 極の 極の 極の
極の 極の 極の 極の 極の
馬苑
正秀

オモクハ
慈姑の字ヨリ

晋書陶潜傳潜嘗言夏月
高卧北窓之下清風颯至自謂
羲皇上人 篔簹和名抄織
為席 許六曰篔簹唐土有草
草紙三登寂の莖やとり

よすの便ナリ

浮活や道付りゝゝるのあと 此處
鴨半角川葦のそよぎ 此 水跡

晋の淵心さういふや

古也形は夜二時の子や 此草 芭蕉

秋の空は帷をかかす 此草 惟然

名物のくさくさゝゝの冬をこい

ふせくよきうおふよふの死

浮ハ扇を手にして世よま交す

帷子の縁りいふよき一鉢も百 支考

秋の部一

名月

名月よ桂露の露や田のくさり 芭蕉

名月の急かきとえて 秋 白

こゝに伊勢の山ありて名月

の秋ころ二かきとてしとれり

雲いづれか非をいふとけりよまる

うさくは月をすくふ物やを

とれりさうさうとけり初時

くぬと園位法師のやとるや

桂露の露横をさう水やをて芋田

渺くともさうさうは老杜の

山家集二月とらふ云

西行上人初稱大實坊園位

渺ハ水ノ遠ナリ

老杜唯雲水のこ縮穢空
雲水川平對石門ノ誤リナシ

古今に秋の暮るる日の柱の冥
やちる光もをたんとらん
とらん

東坡詩「春宵一刻直千金
有清香月有陰

雲水のこ縮穢空
雲水川平對石門ノ誤リナシ
古今に秋の暮るる日の柱の冥
やちる光もをたんとらん
とらん
東坡詩「春宵一刻直千金
有清香月有陰

田蓑島、楳笏

聞評

ちんちん

支考評

名月の清くうなる田蓑島
名月や西よかれに楳笏の月
ものくのつねとらん月見成
ふららたふにさふをさるの月
名月やそ分りかけを人の月
名月や更科よりあをよりあ
名月や更科よりあをよりあ
中川の船よと雲のつく月見成

酒壺
如約
雲法
如月
雲指
涼糸
石玉
砒力

沾圃、寶生左太夫

に父の如く秘して法を傳へ
ておののびて

姨捨を言ふ所の如くやけの月

沾圃

夜を月入ちてや堀の如く

馬光

昔かた月やいふにぬ指の

里奈

月影や海の音やそそ下

牧童

源川の素衣本ねらふにうねを

さし

川上葛飾の素衣堂ヲ思ヒ玉
フニヤ

川上と此川下そ月の友

首彦

十とねりしうあまのそとあは

いさよのい言のらぬかききまのそ

猿轡

セタ

あけやあ田の上のそこの川

時然

星をそとそあて寝れぬ鳥

康業

船形のそそいひにそそ星の影

東潮

おそそそいひにそそ星の影

沾圃

おそそそいひにそそ星の影

乙羽

立秋

粟ぬつやそそそそそ秋

香川

秋を中うねるそそ秋

乙羽

秋子

秋子のそそそそそ秋

柳梅

神中集 薰姫 夕之姫 名

基俊 寶馬コハヒの両名物ナリ

蟬螂セムシヤリテ傍ト加筆ナリ

寶馬コハヒヤ新ニ花ハつくル袋ニ桐ノ 小枝
 火ノ治テ烟ヲまシらシ虫ノ聲ヲ 正房
 秋ノ夜ヤ夢ヲ斬リきリくレ水ノ臨ミ 水臨
 義信也形ハ似合ハル月ノ影ヲ 杜若
 桂樹ヤ何ノ味アル草ノの支 採花
 檜柳ノ枝を片たシ石ノとシ 若草
 昔ノの事を話すレん稗の事 示草
 山ノ分カらシまシて死すル秋ノ柳ノ 犬草
 鳥ノ移リゆレくレ浦ノ管外 鳥草
 鶺鴒ヤ走リまシるル川ノ系 水園
 粟ノ種と又シるル時ヤ吟詠 支考

かのうちをよつふをしたれのあり
 となふおもいふしらけをなの歌ん
 少將尼ノ歌ノ余情を葉ニまシ
 ト入日記ニナリ

かの風聲ニテまらるルカ

稻ノ底ハ稻妻ニ同シ

老のあらうあらうもとくて四十程ノ 道在

秋也

秋風ヤ二高檜ノ影を時 遊ル
 夜ノの静しまらぬ秋ノ柳ノ 式之
 けちうちのあらうり秋ノ風 支考
 松ノ葉ヤ細きもも秋ノ影ノ 風園
 古のうちのまの志を理合外 圃燕
 ちんをもやりもも不相責ム 丸節
 ちんをもやりもも不相責ム 穠雅

稲妻

稻ノ底ハ稻妻ニ同シ 少年 一東

楚土園鏡中雨

一時自又くらくきく口新外
 初時自小端の芋の煮加減
 平押よ五反田くもる時自外
 紫臺やひく時自の炭油り
 梔子も出よ芳野の和時自
 此能の出よハ引込時自
 文も煮や鏡よくくア一之
 石も煮く香煙をぬく時自外
 柿包む口おもく一やむく時自
 高くくく時自の里ハ煮時自
 治中をさくくくのおよおきありの

露沾
 馬寛
 理外
 雲指
 空牙
 為有
 勢口
 理款
 香川
 里圃

沖西風の名

原本辛酉ハ誤り元禄四年辛未
 同六年癸酉ナリ勾選年考ニ元
 禄六年トイフ

東坡詩題ニ菊花開時則重陽
 展ナリ大督ノ御代重陽ハ延喜
 帝ノ御田忌ニ當セ玉フニヨリ十月
 殘菊ノ安ヲ行セ玉フ

日影くくくくくくくくくく
 沖西の影くくくくくくくく
 初、雲や大りさくくくく
 比くくくくくくくくくく
 元禄辛酉くく初冬九日嘉堂
 菊園くく
 空の宮を沖きくくくくくく
 けけくくくくくくくくくく
 ちくくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくくく
 けくくくくくくくくくく

沖圃
 如鯉
 反考

長男ニテ越南へ書損ナリ史記
 世家ニ出
 山家集於や命とを了
 此のくらのよとて
 七

水何のふのふと水や教を
 惟然

在露のちとくくんのくくくく

一高もくくくぬ 車廂

くくくくくくくくくく 土芥

くくくくくくくくくく 夜星

くくくくくくくくくく 夜星

木葉 附 冬枯 風

おののくくくくくくくく 泊塘

くくくくくくくくくく 夜星

冬川や木の葉は黒き岩の白 惟然

半八順風ヲ恐レ逆風ヲ悦ム云

林麓より是をくくくくくく 松風

本松坊字の庵を以て

くくくくくくくくくく 一送

松のくくくくくくくくく 杉林

木のくくくくくくくくく 柳破

木のくくくくくくくくく 乃語

木のくくくくくくくくく 利半

木のくくくくくくくくく 支考

木のくくくくくくくくく 智自

木のくくくくくくくくく 風外

木のくくくくくくくくく 惟然

このくくくくくくくくく 鉄筆水

本枯干草葉よりなる牛の角

麈尾

夷海

夷海 昨より 禱をさしけり

直魚

え比次海鷲も 鴨より出たり

利合

鳥附魚

のりの海をさして

麈尾よりなるぬりも 浦

勾堂

追うけて 漕よりなる魚

青葉

小松よりなる唐申の形

犬毛

八海や 磯の磯よりなる

雲指

敵よりなるぬりも 鴨の足

芭蕉

曲礼注家鴨為鷲

中古霰ノ字ヲ用ヒ來ル誤カ

扱ハ偽字約ハ扱也

海月文選注大如鏡白色正圓
又海鏡トモ書リ

海魚ニモ作ル状如沙魚
イカリ字

立魚を大漁と云ふ 堤 うれ

白木

杓沙よりなるい入へき生海草

利雪

うりくし海月よりなる魚

車庸

又えまぐらなる魚は 魚の海草

俗水

一塩又初白魚や 雲りあり

松如

かくらつや 魚を並べて 降し 穀

拙候

杜夫魚ハ河豚の大きき水と

うりくし越の川よりなる魚

冬月附象

喰おや門 麈尾よりなる魚

里圃

下、ニ 猫の かけ 出に 麈尾の 魚

文学

何れも 森大なる 紙ふも 中
水仙や 門を 出た 江の 月夜 支考

埋火

埋火や 破る 土の中 かけ ぬく
燈 少年 首焦 柳生
自由さや 月を 道り 玉さ ぬ木

雪

初雪や 門を 掃り 夕 石 甚角
朝こ 之や 月を 雪を 燈の 味 今
雪阿 くれ 甲の かけ 雪を 掛 冬葉
鶴鶴 宗い とも とも とも くれ 雪 祐甫

五元集自筆二門の格あらトア
リより、書損カ又一直ニヤ
朝ヨシ込ナリ

とくれをいふはさきの事ナリ

寸草

寸草や ちり ぬく 土の中 かけ ぬく
雪 支考
何れも 森大なる 紙ふも 中 園吟
水仙や 門を 出た 江の 月夜 支考
埋火や 破る 土の中 かけ ぬく 文彦
燈 少年 首焦 柳生 陽和
自由さや 月を 道り 玉さ ぬ木 配力

神楽

神楽 史邦
何れも 森大なる 紙ふも 中
水仙や 門を 出た 江の 月夜 支考
埋火や 破る 土の中 かけ ぬく
燈 少年 首焦 柳生
自由さや 月を 道り 玉さ ぬ木
雪 支考
鶴鶴 宗い とも とも とも くれ 雪 祐甫

此寺ニ大刑ニ着ニ時ノ後草石
今存ナリ

オノイヲ
法教講ヲ俗ニ命講ニ作ル

臘月日釈尊今曉明星ヲ見テ
成道ニ玉ニ日ナリ

大師講ハ土月廿四日天台宗祖智
者大師ノ忌日ナリ

その望をきくぬそまは秋の夕
支考

かまぐさの語はまなび

首の骨ハ福妻のまゝそ耐り
本館

墓原や福妻の屋も柿の水
支梁

法教講

柿も柿も拜後まゝ法教講
法圃

臘ハ

臘をさくらんえねハ納豆汁
許六

けのけれかあれはハ大所講
ぬ約

雜題

法華の生如堂よりてるまは

云来抄ニ再改メ今ノ尉ニヤリ
源一さのトアリ

仏在世釈迦佛ノ在ニ世ニ云

夏念仏百發龍ノ自課ナラン

念堂 庫裏ニ云

如來開帳の時

源一ともおぼしきころるゑ仏は
去来

阿彌陀佛を二本にけりけり
智月

けり細や教とつていかに世
乙島

とのつての川城アヤ不ニ法
重翠

自まつりし所のり念仏
理坡

念堂より在りてり
支考

臨部

送別

元禄七年の夏を在りてり

韻塞格のむのあぢもも
亦の格うき人の旅もも
亦の格うき人の旅もも
亦の格うき人の旅もも
カ愚衆思ス

詩魏風碩鼠無食我黍
三歲貫女莫敢肯顧遊將去
適彼樂土
世達常陸下向江戶とある
時送りの人より

身延山久遠寺日蓮宗本山ナ
リ

本集より洋の山々の如
山家集より山々の如
りすくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく

谷地は溪間ノ谷地ヲ云
公羽ノ名マ、翁ニ給
十國子往古ハ常ノ國子ノ大ナリ
ニ由ナリ翁曰此句主ニアリト

渴セヌナリ

又まじりて

麦のついで餅屋の店のおかし
おろや柿喰ひの坂の上
許さる本多の山もむく時
旅人のくも山もむく時
留別
汝の惟然りやまう志す時
嵐ももまきの草をまき
鮎のまの白魚送るぬれ
甲斐の力延し旅する時
山辺をかき

旅人のくも山もむく時
留別
汝の惟然りやまう志す時
嵐ももまきの草をまき
鮎のまの白魚送るぬれ
甲斐の力延し旅する時
山辺をかき

嵐ももまきの草をまき
鮎のまの白魚送るぬれ
甲斐の力延し旅する時
山辺をかき

鮎のまの白魚送るぬれ
甲斐の力延し旅する時
山辺をかき

甲斐の力延し旅する時
山辺をかき

年よりて牛馬を飼う者
稲妻や津世を免る於麻山
是もまきついで柿喰ひの
出向の國におもむく時
さういふさういふ

そのかみハ谷地をうきし小松
十高もも少松をうきぬ
大名の山もも山もむく時
熊野路

くくくくくくくくく
燕ハ出てまきまき本多路
猿
公羽
許
令
皆良
猿

ゆふのこ橋をくし旅 まくろく
我宅
漢つりて砂路石了系のる
史邦

回國のこくも漸く写勢の

くろく

久春の宿行ハ秋涼
三人
呂丸

我布急しく旅をそさ東
治園

常陸國行ハあふふこは

秋をそそく来んまよまの

秋をそそく来んまよまの

秋をそそく来んまよまの

くろく

西行上人見浦ニテ扇ヲ文墨
トシテ詠歌ニ五トシ古事ニシレ
カ

足洗村ハ水戸ヨリ名古屋ニ至ル
間ニリ

正月十五日ニヤ此日彌ヲ祝フ一和
漢ニリ

三年八四年 書損ナルシ

元禄三年ハ膳所ニ越年シ玉ヒ

初夏ヨリ名山ニ任庵ニ住玉ヒ

又湖南無名庵京師ニ苗杖ニ文

兼津ニモトリ同四年ノ初冬武

江ニ下リ玉フ

塚本孫兵衛名如舟ト云

泊船集ハミテ宿ヲニ作ルマデ

ハ誤カ

世蕉談曰先師迂化の年伊賀

の連衆此因ま一集なきハ殘

念まろく頻よササれ一討諸

終ハ一クと炭俵六月迄ニ成就

一終り一旬後ハ二百ハ多ク

巻々トマツルと云フハト云

小集マテモ出サズト云

極多き情や極小豆粥
支考

初瓜や及よ秋小杖もそ
今

元禄二年の冬西番津の字庵

より武江におもむくと島田の

驛場をうあふく

高ろく石城をのこす
支考

續猿蓑撰集半二前述也
至八日過半後人の竊入ナリ元ヨリ
草編ノ書ナクマ、書損見エ手跡
蓮ニ坊ナクニ不猫蛇ニ翁ノ自撰
ト云ハ片腹ノくきマウ之云云トナ
以返答ノ割然ニ又考曰翁密
撰マテ去来文草ヲ行ナラト
云ハ大ニ偽言ナリニ

續猿蓑著書甚多其の一流の書之何人の撰
と云ふ事ナクハ人ノ述他ノ後何故と野
翁の只松尾何ウ一語許ヤあるれウ一然聖
年却經テ漸ク其ノ書本ヲをわク一書
唐ももウ取ヤウ一語ナリ也中或ハ書け
一あるハ書入其のお厚クゆえハ子孫乃
もそのハナリ一書をウマア何れをあた
め付その書その本を以て亦ハ取録をせ
物也

之録十一箇七月吉日

唐三國本



